

後田窯跡群（77地点の調査）

大野城市教育委員会



写真1 窯を完掘した様子

うしろだ かまあとぐん
後田窯跡群77地点は、大野城市月の浦4丁目の南側、大野城環境処理センターの正門近くにあります。環境処理センターの施設増築に伴って、平成15年4月から5月に発掘調査が行なわれ、奈良時代（約1300年前）の須恵器を焼く窯跡が1基発見されました。

大野城市の牛頸地区を中心とするエリアは、九州最大の須恵器窯跡群「牛頸窯跡群」の所在地として全国的に知られていますが、今回紹介する後田窯跡群77地点もその一角に位置しています



写真2 山の斜面にある窯
(奥の建物は環境処理センター)



写真3 窯が発見された様子



写真4 窯の大きさ



写真5 窯の煙突（斜面上方から）



写真6 出土した須恵器など

写真3は、窯跡が発見された時の様子です。山の斜面に黒色の土が広がっています。この黒色の土は灰原と呼ばれ、燃料に使われた木材の燃えかす（炭・灰）がたまった部分です。この中からは焼き損じた須恵器もたくさん見つかりました。窯跡は灰原の少し上側で発見されました。

窯跡は、山の斜面をトンネル状にくり抜いた「窖窯」と呼ばれる構造で、大きさは長さ約1.8m、幅0.7mでした。大人1人が腹ばいになってやっと作業できる大きさしかありません（写真4）。また、天井や煙を出す穴（煙突）（写真5）も壊れずに残っていましたし、窯の入口（焚口）では、壁を石や粘土で補強していたこともわかりました。

牛頸窯跡群では、古墳時代後期（6世紀～7世紀初め）に長さ10m、幅2mを超えるような大型の窯が造られますが、奈良時代（8世紀）には今回の見つかった窯のように小型の窯が一般化することが知られています。大きな窯を1つ造って須恵器を焼くより、小さな窯をいくつも造って須恵器を焼いた方が、失敗も少なく効率的だったのでしょうか。

写真6は、この窯から出土した須恵器です。灰原を中心に約150kg出土しました。いろいろな種類の器が見つかりましたが、杯や皿、高杯といった直径20cmに満たないような小型の器が大部分を占め、大きな甕などは出土しませんでした。窯の大きさを考えると、大きな甕を焼くことができなかつたのでしょうか。あるいは大きな甕を焼く必要がなくなったために、小さな窯が造られたと考える方がいいのかもしれない。

このように後田窯跡群77地点で発見された窯跡は、窯の構造や大きさ、焼いていた器の種類など、奈良時代の牛頸窯跡群の特徴をよく表した貴重な資料といえるでしょう。（H24.03）